### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title       | 現代アフリカとパン・アフリカニズム:<br>アフリカにおける主体性の問題を中心として  |
|-------------|---|
| Sub Title   | Contemporary Africa and Pan-Africanism  |
| Author      | 小田, 英郎(Oda, Hideo)  |
| Publisher   | 慶應義塾大学法学研究会   |
| Publication | 1964  |
| year        |   |
| Jtitle      | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and  |
|             | sociology). Vol.37, No.4 (1964. 4) ,p.51- 74  |
| JaLC DOI    |   |
| Abstract    |   |
| Notes       | 論説  |
| Genre       | Journal Article   |
| URL         | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara<br>_id=AN00224504-19640415-0051 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 現代アフリカとパン・アフリカニズム

――アフリカにおける主体性の問題を中心として――

小 田 英 郎

序――アフリカにおける主体性の問題

主体性のイデオロギーとしてのパン・アフリカニズム――その前史的展開

Ξ アフリカ・ナショナリズムとの接合

四 主体性のイデオロギー化

序――アフリカにおける主体性の問題

第二次世界大戦を契機とする西欧植民地主義体制の決定的な後退と、それにともなり旧植民地新興国家の輩出は、 一九四

たつて、戦後の国際政治状況を米ソを対極とする権力の分極現象として一元的に把握する従来の認識方法は必然的に修正を 〇年代後半のアジアを起点とし、一九六〇年代のアフリカにいたつてその最終段階をむかえようとしている。この段階にい

余儀なくされ、 現代アフリカとパン・アフリカニズム いまや「東西関係」にくわえて、北半球工業国家群と急速な近代化を目指す南半球低開発国家群との関係、

(四五二)

Ŧ.

すなわち『南北関係』という観点すら導入されつつある。たしかに、東西関係が固定化し、長期的な平和共存段階へ移行し(『) つつある現在の国際政治状況においては、これら新興低開発国家群がもつ比重は急速に増大してきているとい える であろ

テクストにおいてのみ意味をもつているのではない。すなわち、 しかし、こうした低開発国家群の比重の増大は、それが東西関係あるいは東西のバランスにどう作用するか、というコン これら低開発国家群は、 東西援助競争の

ځ

としてその比重を増大させてきたのではなく、東西の長期的な競争的共存という現在の国際政治的状況のなかで、 「たんなる客体」

方国家群が、 家的民族的主体性を確立しようと試みている点にもまた、その重要性を担つている。 南方国家群が、北方の東西両陣営による経済援助競争を与件として、自己の主体的立場を確立、強化しようという側 かえれば、 経済関係を通じて北方国家群のうちの東西いずれのグループのもとに系列化されるか、 南方国家群の側における主体的契機も存在するのである。 要するに、 南北関係といつた場合、 という側面だけでな

一九五九年四月十四日開かれたアフリカ諸国民会議指導委員会の開会演説 において、 つぎのようにいつている。 「われわれ 本稿の対象地域であるアフリカも、 もつとも顕著であるようにさえ思われるのである。たとえば、ギニア共和国大統領セク・ その例外ではない。いや、それどころか、 主体性への志向は、「南方」 ŀ 諸国のうちで 1 V

個性」(African Personality)という言葉がしばしば叫ばれるが、 ら、その将来は、 意志のままにうごく下僕にはならないだろう。 は何度でも倦むことなく、われわれの人権の原則、 表現できるものなのである」 もつばら自分の内部の要求にしたがうことしかできないだろう。そしてこの要求たるや、 (傍点引用者)。 アフリカ、 主権の原則をおしだすだろう……アフリカは、他国の気まぐれや欲望や また、 新生アフリカの主体性を表わすスローガンとして それは搾取と貧困にしばりつけられた二億の人間社会であるか これについて、 ガーナのエンクルマ大統領は、 アフリカだけが 一九五八年四 「アフリ

くて、 が "マルクス主義的社会主義』と"民主社会主義』のような区別をされていない。 力点は、つねに"アフリカ社会主義』にお す。それによつてわたくしたちは、〈アフリカの個性〉を主張し、 わたくしたちみずからの生活方法にしたがつて、 わたく 牲になつた事実をみとめざるをえません。わたくしたち自身の問題を処理し、あるいはわたくしたち自身の運命を決定する かれている」とのべているが、このアフリカ社会主義は、 の点についてコーリン・リーガムは、 導入する場合にもつよくでてくるのである。すなわち、社会主義は「アフリカン・ソシヤリズム」でなければならない。こ のなかにだけ現われてくるのではない。それは、アフリカ人が近代化のためのテクニックとして、たとえば「社会主義」を したちみずからの慣習、 よつて知ることになるでしよう……アフリカの歴史をふりかえつてみますと、 が、その本来の衝撃をあたえる機会が、いまあたえられようとしているのです。世界はそれを、アフリカ自身の息子の声に にも長いあいだ、 和と善意へアフリカの貢献する第一歩をうちだすために、 月にアクラで開かれた第一回独立アフリカ諸国会議の数日まえの放送で、つぎのようにのべた。「この偉大な大陸の歴史で ームの社会主義ではなく、 わたくしたちの運命の主人なのです……わたくしたちは、国連憲章にしたがつて、世界の平和と安全をねがつていま 家族・村落・部族のあいだの協調にもとづくコミュナル・フォームの社会主義なのである(6) あまりにも長くわたくしたちは黙しつづけてきました。 いまや事態は一変し、 こんにちで は、 国際問題に独自の役割をはたす力をもつアフリカの真の独立国の指導が、相互の国家的問題を論じ、 他人の声によつて語られてきました。国際問題のうえで〈アフリカの個性〉とわたくしのよんできたもの 伝統、文化を発達させることができるのです」。 こうした主体性の主張は、(3) コミュナル・フォームの社会主義」であり、個人の集合としてのコレクティヴィズムではない。 「アフリカ・ナショナリズム左派の用語法においては、 社会主義とマルクス主義は、 会議を開くことになりました。歴史のうえで、 セネガルのサンゴール大統領によれば、 わたくしたちがあまりにも長く外国支配の犠 「コレクティヴィスト ただ単に指導者の演説 わたくしたち自身 アフリカはあまり 国際的な平

ればならない」とのべているが、この「民族意識の成長」とは「主体性の意識の成長」であり、「変革の嵐」とは「主体性の(?) れわれは、それを事実として受けいれなければならない。そして、われわれの政策は、この事実を考慮しつつたてられなけ 陸を吹きまくつている。そして、われわれが好むと好まざるとにかかわらず、この民族意識の成長は政治的事実である。 ラン英連邦首相(当時)は、 このように、「アフリカの主体性」の主張は、 西欧の旧植民地本国側でも十分認識している。 同年二月、南アフリカ連邦(現南アフリカ共和国)議会における演説のなかで、「変革の嵐がこの大 あらゆる局面で、あらゆる機会につよく叫ばれているのであるが、 たとえば、一九六〇年のはじめにアフリカ各地を歴訪したマクミ これに

定のパースペクティヴをえがくためには、 る。したがつて、伝統社会から近代社会への移行段階にあるこれら低開発諸国あるいは低開発諸地域の変革過程について一 のイデオロギーにまでたかめられ、 むろん、このような主体性の主張は、 このような主張は、 ニューアンスあるいはその強調度に多少の相違こそあれ、 低開発諸国あるいは低開発諸地域の近代化を条件づける役割すらはたして いるの であ 現在の国際政治における力関係からみて、容易には貫徹されえないであろう。 まず変革の主体的条件― 主体性のイデオロギーに照明をあてることが必要とな 事実として存在し、ある場合には主体性

主張の集中的具現化」にほかならない。

が、 れ ロッパに発生した、 それ以後地についた実践運動として脱皮するとともに、前述のような主体性の主張とからんで、主体性のイデオロギー 本来、パン・アフリカニズムは、 アフリカ系ニグロのシオニズムにもたとえられるような運動であつて、第二次大戦後アフリカに導入さ アフリカに生れ育つたものではなく、二○世紀初頭に西インド諸島、 アメリカ、

アフリカ

の場合、

その主体性の主張は、

現代にいたつてパン・アフリカニズムとしてイデオロギー化されているのである

として形成されるにいたつたのである

そこで、本稿においては、以下、パン・アフリカニズムがイデオロギー化される過程と、それが現在もつているヴァイタ

リティーの源泉とを明らかにすることとしたい。

- (1) 南北関係という観点の導入については、たとえば、内山正熊「国際政治における南北問題」(『外交史及び国際政治の諸問題 と南北問題」、川田侃「南北問題の所在と核心――経済開発問題を中心に――」、世界第二一七号、昭和三九年一月、など。 還曆記念論文集』、昭和三七年、慶応通信)を参照。とくに七六一―七六四頁。 なお、 南北関係については、このほか、斎藤孝「冷戦の新段階
- 2 セク・トゥーレ著、小出・野沢訳『続・アフリカの未来像――国づくりへの理念』(一九六一年、理論社)一九頁。
- (3) Kwame Nkrumah, I Speak of Freedom: A Statement of African Ideology, Heinemann, London, 1961. 野間訳『自由のための自由: フリカは創造する』(一九六二年、理論社) 一四六―一五〇頁。
- (φ) Léopold Sédar Senghor, The African Path to Socialism (Venture, Fabian Commonwealth Bureau, London, November, 1961) cited in Colin
  - 4 Colin Legum, Pan-Africanism: A Short Political Guide, Pall Mall Press Ltd., 1962, p. 127.
- (6) Ibid., p. 128. なお、この点については、L. S. Senghor, "Negritude and African Socialism," in St. Antony's Papers Number 15: Legum, op. cit., p. 128. Affairs Number Two, Chatto & Windus, London, 1963, p. 16 参照。
- ( $\sim$ ) Excerpt from a Speech by the Prime Minister, the Right Honourable Harold Macmillan, P. C., M. P., to the Houses of
- Co., Inc., California, 1961, p. 8. of the Union of South Africa, in Cape Town on February 3, 1960. Peter R. Gould (ed.), Africa: Continent of Change, Wadsworth Publishing
- (8) 変革の主体的条件を究明することの重要性について、 たとえばJ・ウォディスはアフリカ研究に例をとりつつ、「現代のアフリカに関する Africa: The Roots of Revolt, Lawrence & Wishart, London, 1960, p. xiii)° すべての研究の、唯一のリアリスティックな出発点をなすものは、アフリカ人の態度、起訴状、政策、綱領である」とのべている(Jack Woddis,

# 主体性のイデオロギーとしてのパン・アフリカニズム――その前史的展開

はアフリカ系の個人がもつている、アフリカ大陸は民族的故国であるとする信念、アフリカ大陸をアフリカ人の指導のもと アメリカのすぐれたアフリカ研究者 J・S・コールマンは、 パン・アフリカニズムを定義して、「あるアフリカ人もしく

に統合し独立させたいという願望、 およびその信念と願望とを拡大させようとする活動である」とのべているが、過去半世(!)

五六

紀におよぶパン・アフリカニズムの発展過程をたどれば、この定義のなかに示されている「信念」、「願望」、「活動」が、時 空間的条件の変化にともなつて、 いかに多様な形態をとつて現われたかが明瞭となろう。

間的、

本稿の目的は、

アフリカニズムのイデオロギー化の過程を明らかにすることであるが、ここで、まえもつて一応、パン・アフリカニズムの 前述のように、実践運動としてのパン・アフリカニズムの歴史そのものを追究することではなく、

歴史を時期的に区分しておくのが便宜的であると思う。

リゲ 般に、パン・アフリカニズムの歴史は、アメリカ、西インド諸島、 ンチャの運動として、 アフリカを舞台として植民地ナショナリズムと接合しつつ発展した時期(一九四五年以後の時期)とに二分され アフリカをはなれて展開された時期(一九四五年以前の時期)と、 ヨーロッパなどにおけるアフリカ系ニグロ・インテ アフリカ・インテリゲンチャの手

西インド諸島、ヨーロッパにおけるアフリカ系ニグロ・インテリゲンチャの運動として形成され、展開されてきたのであり、 このうち、 第一期すなわち一九四五年以前の時期におけるパン・アフリカニズムは、 前述のように、 もつばらアメリカ、

る②

したがつて、 ルラースタインのいうように「抗議運動」であつたとしても、西欧世界内部における人種的不平等への抗議であり、 いわば根をおろすべき土地をもたない「西欧世界の黒人運動」としてとどまることとなつた。それは、 I . 祖国

|三回ロンドン・リスボン(一九二三年)、第四回ニューヨーク(一九二七年)、第五回マンチェスター(一九四五年)とつづくパン・ アフリカ」は、 パン・アフリカニズムの父といわれ、第一回パリ(一九一九年)、第二回ロンドン・ブラッセル(一九二一年)、第 せいぜいのところ、かれらを相互にむすびつけるシンボルとしての、抽象的観念にしかすぎなかつたのであ

アフリカ会議の大部分を事実上指導したウイリアム・E・バグハート・デュボア博士は、その自伝のなかでつぎのようにい

色アジアを通つて南洋諸島にまで拡大している。わたくしをアフリカへとひきつけるものは、この統一性にほかならない」。 時代のニグロ・インテリゲンチャにとつて、アフリカは、せいぜいのところ間接経験的存在でしかなかつたのである ここで強調されているのは、奴隷の身分およびそこから派生する差別と侮蔑であり、アフリカという存在はかれの意識のな 身分、差別と侮蔑というその社会的遺産なのである。この遺産は、アフリカの子孫を相互にむすびつけるばかりでなく、黄 り、皮膚の色というしるしは、しるしとして以外は比較的重要性に乏しい。すなわち、この血縁関係の真の本質は、 この絆、それをわれわれのあいだにつくりあげているものは、いつたいなんであろぅか?と。アフリカはもちろんわたくし かで明確な像をむすぶことなく、「黄色アジア」や「南洋諸島」と同一の線上に遠くかすんでいた。 デュボアおよびその同 つたし、また、アフリカに対して、ろくに注意をはらいもしなかつた……しかし、肉体的な絆などとるにたりないものであ の故国である。わたくしの父親も、そのまた父親も、アフリカをみたことはなかつたし、 アフリカの意味するものを知らなか つている。「アフリカに目をむけるとき、わたくしは自問する。とうてい説明しつくせないほどのつよい感じをもつてせまる 奴隷の

会議)、「たんにヨーロッパ人のためにではなく、アフリカ人のためのアフリカの発展」を主張した(第三回会議)けれども、そ 護」をうたい(第一回会議)、「おくれた人種グループの自治」、「ニグロが自分たちの土地へかえること」などを要求し(第二回(6) 然としてつよい力を保持していたというこの時期の国際的条件にもよるであろうが、他方では、ワルラースタインのいうよ 民族的故国であるとする信念」はまだかたまらず、「アフリカ大陸をアフリカ人の指導のもとに統合し、独立させたい、とい いどのところにとどめられた。本章の冒頭にあげたパン・アフリカニズムの定義にたちかえつていえば、「アフリカ大陸は の実践的な目標は、「世界中のアフリカ(系)人が、その権利の主張を、現にかれらが属している国の政府に反映させる」て したがつて、一九四五年までのパン・アフリカニズムは、形式的には、たとえば大会決議のなかで「アフリカ土着民の保 も明確なかたちをもつ運動にまで形成されてはいなかつたのである。それは、 西欧植民地主義体制がアフリカで依

五七(四五七

五八

リカニズムにほとんど関心を示さなかつた」ことにもよるであろう。(タロ) **うに、「会議(パン・アフリカ会議を指す—引用者)がアフリカ問題に関心をもつていたにもかかわらず、アフリ** カ 人はパン・アフ

は、パン・アフリカニズムの主流からはずれてはいたけれども、アメリカのアフリカ系ニグロを直接アフリカとむすびつけ ようとした点で、ある意味ではもつとも明確な「アフリカニズム」であつたといえるかもしれない。しかし、ジャマイカ出 もつとも、この間、 一九二〇年から一九二五年にかけて展開された「アフリカへの帰還運動」 Back to Africa Movement

UNIA (Universal Negro Improvement Association) を母体とし、一九二四年にはリベリアへ大量のニグロを植民させる計画をた 警戒心をかきたてたことのために、 身のアフリカ系ニグロ、マーカス・アウレリウス・ガーヴェイによつてはじめ られ たこ の「アフリカへの帰還運動」 リベリア政府の承認までとりつけながら、 挫折のやむなきにいたつた。かくて、「黒いモーゼ」の託宣も、 結局はリベリアの国内事情と、ガーヴェイ個人の強烈な性格がリベリア側の(ユ゚) 「約束の地」 への希望

も、夢散してしまつたのである。

総じて、この時期のパン・アフリカニズムは、その担い手の側における主体的条件の欠如と、その理念の曖昧さとのため

種的ファシストと称していたガーヴェイですらも、基本的には同化主義者たらざるをえなかつたのである。(4) はなく、訴願だつたのである。 を限定づけた普遍的平等を反映して、 指導した主流派パン・アフリカニズムも、アフリカをはなれた「流浪の」ニグロたちの相互異質性と、かれらの目標と活動 に、人種的不平等への消極的な抗議運動のワクをでることができなかつた。もつとも偏狭な人種主義に立脚し、みずから人 一種のコスモポリタニズムへと傾斜していた。しかもそれは、(ヒヒ) 人種的平等への主張で またデュボアの

- 1 James S. Coleman, Nigeria: Background to Nationalism, California Univ. Press, 1958, p. 425
- 2 第一期と第二期を分かつのに一九四五年をもつてしたのは、次章でも示したように、同年十月にマンチェスターで開かれた第五回パン・ア

六一年、理論社、六一頁)として、同会議を契機とするパン・アフリカニズムの質的転換を指摘している。 覚醒をもたらしたのが、この第五回パン・アフリカ会議だつた。そしてこれが、現実に、アフリカ人のためのアフリカという大衆運動に育つて あるが、まえの四回とは、 いつたのだ」(K. Nkrumah, Ghana, An Autobiography of Kwame Nkrumah, 1957. 野間訳『わが祖国への自伝――アフリカ解放の思想』、一九 ン・アフリカニズムのターニング・ポイントがあつた」(S. Hempstone, The New Africa, Faber and Faber, London, 1961, p. 630)とのべてお フリカ会議が、パン・アフリカニズム運動の質的転換を画したからである。たとえば、この点について、 S・ヘムプストーンは、「ここに、 この第五回パン・アフリカ会議に参加した K・エンクルマも、 その自伝のなかで「この会議は、 会の空気も光景も思想もはつきりちがつていた。 アフリカ民族主義をおおやけに声明し、アフリカ人の政治意識の 開催された数の上からは五回目で

- (♡) Immanuel Wallerstein, "Pan-Africanism as Protest," in M. A. Kaplam (ed.), The Revolution in World Politics, John Wiley & Sons. 1962, p. 137 Inc.
- (4) 一般に一九一九年のパリ会議を第一回パン・アフリカ会議とする(たとえば、G. Padmore, Pan-Africanism or Communism? Struggle for Africa, Dennis Dobson, London, 1956, pp. 119-129) のに対して、一九〇〇年にトリニダッド出身の黒人弁護士 H・シルヴェス タッチをしたわけではないにしても、「パン・アフリカニズムという言葉をはじめて辞書のなかにもちこみ、 た」(Padmore, op. cit., p. 118)という記述からも明らかなように、ロンドン会議は、デュボアの指導したパン・アフリカ会議へ直接 パトン・ チェンバレン氏を通じて受けとつたとつたえられる(Legum, Ibid, p 25)。「不幸にして、シルヴェスター=ウイリアムス氏は数年後西インド Legum. op. eit., p. 25) 覚え書をヴィクトリア女王に送り、「女王陛下の政府は土着民族の利益と福祉を見すごさないであろう」という回答を、 つて第一回会議としておく。 pp. 24-25)。いずれを第一回会議とするかはそれほど重要な問題ではないので、本稿では一応パドモアにしたがつて一九一九 年のパリ会議をも ター=ウイリアムスの後援をえて開かれたロンドン会議をもつて、第一回パン・アフリカ会議とする説がある(た と えば C. Legum, op. cit., 西インド諸島から約三○人の代表を集めた」(W. E. B. DuBois, The World and Africa, Viking Press, New York, p. 7) そして没した。パン・アフリカという概念は、 第一次大戦後デュボア博士によつて復活されるまで、 活動を休止し たま まで あつ なお、一九○○ 年のロンドン会議は、「南アおよびローデシアのアフリカ人に対する取あつかいに抗議する」(C 少数の北米有色人を含め、 といわ
- 5 W. E. B. DuBois, Dusk of Dawn, New York, 1940, cited in C. Legum, op. cit., p. 24

れるだけの重要性はもつていたのである。

- 6 盟諸国は、すでに提案せられている国際労働規約と類似の、アフリカ 土着民の国際的な保護に関する法規を作成す べき こと」がう たわれてい Resolution of The Pan-African Congress, Paris, 1919. (C. Legum, op. cit., Appendices I. pp. 133-134). 同決議の冒頭に「連合国ならびに同
- Padmore, op. cit., p. 13.

現代アフリカとハン・アフリカニズム

- (∞) Ibid., p. 140
- (5) Ibid., p. 143. & Wallerstein op. cit., p. 140
- (2) Wallerstein, Ibid., p.
- 的基盤をもつていた。なお、その母体であるUNIAは、一九二三年までに、六○○万にたつする会員を擁していたと自称していたが、反対者 たちは、その数字は誇張であり、実際はその半分にもみたなかつた、と論難していた(Padmore, op. cit., p. 89)。 Back to Africa Movement は、ニグロ・インテリゲンチャおよびニグロ中産階級の支持は受けなかつたが、広汎な大衆
- (12) ガーヴェイは、一九二四年にリベリア政府と契約をむすび、最初の二年間に二万ないし三万家族のニグロをリベリアへ植民させることとし まつたといわれる (Padmore, Ibid., pp. 99-100)。 治的疑念とからんで、リベリア政府は、自国の極端な財政的危機を打開する一助として、UNIAが陸あげした建築資材を没収し、処分してし 書館、公会堂、文化センター、学校、工業大学、発電所など、各種の公共建築物を建設する仕事に着手したが、後述する(註13参照)ような政 た。そのために、UNIAは約二○○万ドルの予算を計上し、それをもつてリベリアに、病院、市役所、裁判所、郵便局、警察署、消防署、図
- (3) ガーヴェイ自身は、リベリア共和国に対してなんら政治的意図をもつていない旨、同政府に対して確言していたが、かれはたとえは、 ヴェイは、リベリア共和国建国以来の支配政党トゥルー・ホイグ党 True Whig Party の勢力を打倒する計画をもつているのではないかという 予定地の首府ケープ・パラマスのもつとも有力な人物ジェイムス・ドウセン James Dorsen と密接な関係をもつていたといわれ、 疑念をもたれるにいたつた。くわえて、かれがリベリアへ植民交渉のために派遣した使節が当時のリベリア政権を非難する文書をもちかえつた う悲劇的結果をうむにいたつたのであるといわれる(Padmore, Ibid., pp. 99-100)。 ことが、ガーヴェイの政敵によつてリベリア側へ通告され、ついに植民契約の破棄、リベリア駐在UNIA会員の逮捕、建築資材の没収、とい
- (4) ガーヴェイ自身も認めていたように、かれのドクトリンは、人種的ファシズム racial fascism に立脚していた。かれはいつている。「われわ 模倣したのである。ところが、反動的なニグロどもがそれをサボタージュした」(Padmore, Ibid., p. 97) と。 大衆は、かれらの唯一の希望がこの極端なナショナリズムにあることをしり、容易にこれを支持した。ムソリーニは、わたくしのファシズムを れこそは最初のファシストであつた。われわれは、アフリカ解放のための訓練を受けつつある、規律ある男子、女子、子供をもつていた。黒人
- (15) たとえば、ワルラースタインは、ガーヴェイズムについて、たとえばヨーロッパ貴族風の衣裳や勲章をつけたり、その倒錆した人種主義を ぎやくにしたにすぎない、とのべている(Wallerstein, op. cit., p. 141)。 ふりかざしたりした点などからみて、そのイデオロギーは基本的には同化主義的であり、ヨーロッパ的な議論の前提を受けいれ、 たんに結論を
- David E. Apter & James S. Coleman, "Pan-Africanism or Nationalism." in The American Society of African Culture (ed.). Pan-Africanism

Reconsidered, Univ. of California Press, 1962, p. 85

四五年十月にマンチェスターで開催された第五回パン・アフリカ会議は、転換へのランドマークをなすものであつた。 民族主義運動と接合することによつて、アフリカ化への道をあゆみはじめることとなつたのである。そうした意味で、 揚をひきおこしたが、パン・アフリカニズムは、 九四五年以前のパン・アフリカニズムが 「アフリカ化されたパン・アフリカニズム」であるということができる。 西欧植民地本国がもつていた抵抗力のいちじるしい弱化は、その対点としての植民地民族主義の抬頭、 「アフリカなきパン・アフリカニズム」であつたとすれば、一九四五年以後 まさにこの時期に少数のアフリカ人の手でアフリカに導入され、 第二次大戦を契機とする植民地主義の正 アフリ 一九 昻 カ

れた。 表明されている根本思想を可決し、政治的自由と経済的発達をもとめる闘争を支援するために、全世界のアフリカ人とその 出席した。 マ(現ガーナ共和国大統領)は、 れぞれの国で名声と権力をうることになつた人物であつた。この会議に参加し、会議宣言の大部分を起草したK・エンクル またG・パドモア、 むろん同会議には、その数こそ減少していたとはいえ、デュボア博士を中心とするアメリカ・ニグロも出席していたし、 もつとも重要なのは、 そして非暴力的積極行動の戦術によるアフリカ的社会主義という思想が満場一致で採決された。また〈人権宣言〉に 各植民地の状態についての報告があり、アフリカの植民地問題についての、資本家と改良主義者の主張は否認さ これらアフリカ人指導者の大部分は、当時まだ無名であつたが、しかしかれらはいずれも、遠からずそ(2) C・L・R・ジェイムス、P・ミリアード等を含めた西インド諸島系ニグロも多数参加していた。しか 第五回パン・アフリカ会議が つぎのように説明している。「会議はたいへんな成功で、 全世界から二○○名をこえる代表が 「アフリカのわかい指導者たちのためのはじめての会議であつた」(1)

現代アフリカとパン・アフリカニズム

子孫に、政党、労働組合、

協同組合、農民組織に加盟するよう勧告した」(傍点引用者)。

ば、たとえそのためにかれらや世界が破滅しようとも、 ムの政治化であり、 フリカ民族主義――アフリカにおける植民地主義、人種差別主義、 つたえなければならないであろう」と。また、エンクルマは、「アフリカ人が出席者の大多数をしめていたので、(5) れ代表は平和を信仰するものである ……しかし、もしも西欧世界が暴力で人類を支配する決心をいまなおもつ てい る なら マルクス主義的社会主義を、その基本原理として採用した」とのべているが、これこそ、まさにパン・アフリカニズ(6) 「消極的な訴願」 民族主義化であろう。 たとえば、K・パニッカルは、 この点について、「パン・アフリカニズムが政治 の姿勢ではなく、「積極的な闘争」の姿勢である。 アフリカ人は自由をかちとるために、最後の手段として、 帝国主義に対するアフリカ民族主義の反逆―― 事実、 会議宣言はいつている。「われわ 暴力にら 会議はア

「社会主義」という言葉は、宣言のなかにはでてこない。しかし、たとえば西欧植民地主義を攻撃するのに 的現実の領域に入つたのは、 一九四五年のマンチェスター会議においてであつた、といえよう」とのべている。もつとも、(?) 「帝国主義(的)」

うに、 的社会主義をその基本原理として採用した」こととみなす解釈もなりたつであろう。 経済的民主主義を唯一の真の民主主義として歓迎するものである」という決議を採りいれたことをもつて、「マル クス主義 という用語を使用していることなどからみて、 たしかにマルクス主義的ムードはあつたであろうし、(8) 「パン・アフリカニズムのイデオロギーにおける、 資本の独占、 および私有財産と企業とが、個人的利益の追求のみに利用されるきまりを非難する。 一つの支配的なテーマは、 事実、アプターおよびコールマンのよ マルクス主義的社会主義である」とす また会議宣言が、「わ

「政治化」、「民族主義化」、「アフリカ化」をもたらした。 かくて、 パン・アフリカニズムは、 念へと転換をとげたのである。 同時にふたたび 冒頭の定義にたちかえつていえば、「アフリカ大陸は民族的故国であるとす それはともかくとして、 この第五回パン・アフリカ会議は、 前述のように、 パン・アフリカニズムの 

る信念」も、 「アフリカ大陸をアフリカ人の指導のもとに統合し、 独立させたいという願望」もここに明確化し、 以後、

民

族主義運動と接合しながら、 主体性のイデオロギーへと形成されていくことになるのである。

アフ て われわれは共同してやることになるだろう…… なぜなら、 アフリカの全部が自由になり、 独立し、 「政府は、 ことは、アフリカの統一と独立を同次元的に考える現代アフリカの指導者の認識方法からも、 IJ プ 全アフリカの統合をその目的とするパン・アフリカニズムは、表面的には矛盾するようにみえるかもしれない。しかし、ア 主義とのあいだに、 、ターおよびコールマンのいうように、「アフリカ独立諸国支配者の国家建設の努力を、「オサンス゚ルサクッスム いるのである カ リカの目標である」、「われわれは、 という決意と信念を披瀝している。 イニズ 実際に解決されるものはなに一つとしてないからである。そんなわけで、アフリカの部分的な独立は、アフリカの実質 前述のようなパン・アフリカニズムの政治化・アフリカ化・民族主義化は、パン・アフリカニズムとアフリカ民族 ムとみなすことは、まつたくあやまりであり、 アフリカの独立と統一の政策を、わたくしたちに可能な勇気と財源の全部をささげて追求するつもりでおります。 エンクルマは、「ガーナの解放は、 本質的な背反関係がないことを意味する。 また、セク・トゥーレは、「アフリカは、はつきりと選択した。独立と統一、これが われわれ共同の祖国を……現代史の次元で建設しなければならない。この建設を 統一されるまで、永続的な平和は、 全アフリカ大陸の解放とむすびつかなければ無意味である」といい、さらに(3) 非現実的であろう」。 むしろ、 両者は相互補完的なのである。この(ユ) われわれの基本的な諸課題のうちには、 本来、 民族国家の強化・発展を志向するはずの民族主義と、 世界にありえない、とわたくしたちは信じま うかがいしることができる。 共同で解決されなけれ

< ·わえて、「パン・アフリカ概念が多くのアフリカ指導者たちにアピールしていることには疑問の余地がない」とすれば、(fi)

現代アフリカとパン・アフリカニズム

他の指導者の言葉を引用する必要はない。ただここでは、J・クラッチャーの説明をつうじて、アフリカ

現代アフリカとパン・アフリカニズム

と和合する幸福をあたえるであろう、ということである」。(::) し、経済発展に拍車をかけ、あたらしいアフリカ化された理念の交換と同化を容易にし、アフリカ人に平和と、自分の同胞 によれば、「その理由は、 の指導者たちがアフリカの統一を要求する理由を、一般的に理解しておけば、それで十分であろう。すなわちクラッチャー 世界の問題に関して、 アフリカに強力な無視しえない 発言権 をあたえ、 トライバリズムやバルカン的葛藤を克服 アフリカの統一が、アフリカを再植民地化、 非アフリカ諸国への経済的文化的従属等の危険から

て意識のなかに定着しきつていない現代のアフリカにおいては、ナショナリズムそのものがもつ重みは、相対的にすくなく た方が、より真理にちかい」(傍点引用者)のが現実であり、しかも、サハラ以北をふくめても、ネイションが運命共同体とし ネイションをつくつているというよりも、サハラ以南のアフリカには、強固に凝結したネイションはまだ存在しないといつ のであろう。 般的にいつて、右のようなインタレストは、本来ならば、大部分ナショナルなレベルで意識され、追求されるはずのも しかし、R・エマースンのいうように、「おのおのの政治権力が人種分布を無視して引かれた境界線の内部に

ならざるをえない。

かくて、

ナイジェリアの一政治家が「パン・アフリカニズムは、アフリカ・ナショナリズムの投影である」とのべても、いささかも、 務省関係者が「政治的コンテクストにおいては、ナショナリズムはパン・アフリカニズムの最前線である」といい、また、 にはおなじだということである。すなわち、主要な相違は規模の相違なのである」(傍点引用者)。したがつて、ガーナの一外にはおなじだということである。すなわち、主要な相違は規模の相違なのである」(8) 「決定的なポイントは、ひとたびアフリカの伝統的政治社会をこえてしまえば … 統一が内包する問題点、 争点は、

ン・レベルへ移行することが可能となる。要するに、ナショナリズムといい、あるいはパン・アフリカニズムといつても、

前述のようなインタレストは、 比較的抵抗な しに、 ナショナル・レベルからパン・アフリカ

不思議ではない。

そうであるならば、パン・アフリカニズムとアフリカ・ナショナリズムは、反植民地主義を共通分母として、質的にいちじ るしい相似性をもつこととなる。こうした認識は、パン・アフリカニズムとナショナリズムの相違を規模の大小にもとめる わゆる客観的なナショナリティーを凝集要素とするものではなく、反植民地主義を媒介として形成されると主張しているが、 これに関連して、たとえばJ・カウツキーは、低開発国のナショナリズムは同一の言語、文化、宗教、人種といつた、い

(-) Legum, op. cit., p. 31.

認識方法を、側面からささえるであろう。

- (2) この会議に参加したアフリカ人指導者のなかには、 K. Nkrumah, J. Annan, E. J. duPlan, K. Taylor, J. Appiah, J. C. de Graft Johnson (シェラレオネ)、R. Armattoe (トーゴ)、P. Abrahams, M. Hluli (南ア)、O. Makonnen 等がふくまれていた (Ibid., pp. 31-32)。 (以上カーナ)、Chief H. O. Davies, Q. C., M. Williams, Chief S. L. Akintola (以上ナイジェリア)、J. Kenyatta (ケニア)、Wallace-Johnson
- (3) エンクルマは、その自伝のなかで、「帝国主義諸国に対する重要ないくつかの宣言がこの会議で採択されたが、その一つはデュボアが書き、 のこりはわたくしが書いた」とのべている。エンクルマ著、野間訳『わが祖国への自伝――アフリカ解放の思想』六一頁、
- 前掲書、六○-六一頁。
- 5 Declaration to the Colonial Powers, The Pan-African Congress, Manchester, 1945. Legum, op. cit., Appendices 2, p. 137.
- (6) エンクルマ著、野間訳『わが祖国への自伝――アフリカ解放の思想』六一頁。
- (~) K. M. Panikkar, Revolution in Africa, Asia Publishing House, 1961, p. 144.
- 着民による西アフリカの工業化が帝国主義的統治者によつて阻害され、 妨害されており、その結果、 生活水準は生存線以下におちてしまつた. 主義列強によつてつくられた人為的分割・国境は、西アフリカ諸国民の政治的統一をさまたげるための、 故意の手段である」(同――e)。「土 (経済・西フフリカの経済建設に関する決議——b)(傍点引用者)。Resolutions of Pan-African Congress, Manchester, 1945, Legum, op. cit. たとえは、会議宣言のなかにはつぎのような言葉がある。「西アフリカ諸地域への、うぬぼれにみちた立憲的改革の導入は、 ひきつづき人
- $(\circ)$  Declaration of the Colonial Powers, The Pan-African Congress, Manchester, 1945, Ibid., p. 137
- (2) Apter & Coleman, op. cit., p. 86.

- (11) Ibid., p. 96
- $\widehat{12}$ R. Emerson, "Pan-Africanism," International Organization, XVI. 2, (Spring, 1962), p. 275.
- (1) エンクルマ著、野間訳『自由のための自由――アフリカは創造する』一五四頁。
- (4) 前掲書二二二頁
- (15) セク・トゥーレ、前掲書、小出・野沢訳一八頁
- (16) 前掲書一六頁。
- 17 Collier-Macmillan Ltd., London, 1963, p. 168 A. Rivkin, The African Presence in World Affairs—National Development and its Role in Foreign Policy—The Free Press of Glencoe,
- 18 J. Crutcher, "Pan-Africanism: African Odyssey," Current History, Vol. 44, No. 257 (January, 1963), pp. 2-3
- R. Emerson, From Empire to Nation: The Rise to Self-Assertion of Asian and African Peoples, Harvard Univ. Press, Cambridge, Mass.,
- 1300, p. 120.
- 2) Apter & Coleman, op. cit., p. 83
- (a) R. M. Akwei (Councellor, Embassy of Ghana to the United States), Comment, The American Society of African Culture (ed.) op. cit.,
- $\binom{2}{2}$  W. Abengowe (Member, House of Assembly, Eastern Region of Nigeria: Deputy Chief Whip for the Government), Comment, Ibid.,
- and Communism, John Wiley & Sons, Inc., 1962, p. 32, p. 38 J. H. Kautsky, "An Essay in the Politics of Development," in Kautsky (ed.), Political Change in Underdeveloped Countries: Nationalism

### 主体性のイデオロギー化

几

制することとなる。 これを土台として発展する段階に入ると、アフリカ・ナショナリズムの基本的動向それ自体が、パン・アフリカニズムを規 パン・アフリカニズムが、アフリカ化され、政治化されてナショナリズムと接合し、(これと競合するどころか、むしろ) したがつて、現代におけるパン・アフリカニズムの活性化は、まず、アフリカ・ナショナリズムの発展

方向・現代的構造との関連において把握されなければならないであろう。

すカルチャー・コンフリクトについては、R・エマースンの解説を引用すれば十分であろう。すなわち、エマースンは、 アルトラ・アフリカニズムがアフリカ大陸全体に拡大しつつある」とのべている。ところで、このような類型化の土台をな(キ) であつた」とのべているのである。 近代化を志向しながらも、コミュニティそれ自体ならびにその過去への誇りをともなう、 ゲル的弁証法流の民族主義的ジンテーゼ、すなわち、すくなくともその指導者たちに関するかぎりは、依然として西欧化、 のつぎの位相は、 場合の、これらの人びとの最初のリアクションが、一般に現存する秩序に対しての外国ぎらい的擁護であつたとすれば、そ 欧文化のインパクトと、 それに対する非西欧的伝統社会のリアクションについて、「西欧なるものがそのうえに 課重された ナリズムを、⑴伝統主義的ナショナリズム、⑵西欧化ナショナリズム、③アルトラ・アフリカニズム、に類別し、「いまや、 それでは、アフリカ・ナショナリズムの発展方向ならびにその現代的構造は、どのようにしてとらえたらよいであろうか。 これについて、たとえばG・シェファードは、文化変容ないしカルチャー・コンフリクトの観点から、アフリカ・ナショ 無批判的自己卑下、ならびに、外国の優越性の承認への方向転換であつたであろう。第三の位相は、 コミュニティの主張ないし再主張 ^ | 西

はアフリカ文化の抬頭をあやうくするものであるとして、これをはげしく非難するようなタイプのナショナリズムなのであ なにものにもおとらないものとして讃美しようとし、 トラ・アフリカニズムは、まず第一に西欧化に対するリアクションであり、アフリカの歴史と文化を本質的に偉大なもの、(3) はアルトラ・アフリカニズムに、それぞれ対応するものとみることができよう。事実、シェファードの規定によれば、 ここにいう「最初のリアクション」は伝統主義的ナショナリズムに、第二の位相は西欧化ナショナリズムに、 西欧からの政治的独立のみならず、完全な文化的・経済的独立をも主張し、アフリカ以外のブロックに依存すること 西欧デモクラシーを批判し、あたらしいアフリカ・デモクラシーを唱 第三の位相 アル

六八

る。3

つある」のであり、「アフリカの多くがアルトラ・アフリカニズムに到達した」のである。(~) ヨリ高度のアフリカ意識をもつたナショナリズムの形態、すなわちアルトラ・アフリカニズムにむかつて、 という必然的コースにそつた、アフリカ・ナショナリズムの発展段階的形態なのである。そのゆえに、 ならない。すなわち、上述の三類型は、エマースンの指摘する、 ところで、 伝統主義的ナショナリズムは「消滅しつつある」のであり、西欧化ナショナリズムは「その速度・道程こそことなれ、(5) たんなる並列的な類型の提示ではなく、 シェファードの場合、いわゆる伝統主義的ナショナリズム、西欧化ナショナリズム、アルトラ・アフリカニズム 一種の縦列的な発展段階論的類型として設定されていることに注目しなくては 西欧文化に対しての「抵抗―同化―伝統への発展的回帰」 現代アフリカにおい 急速に変化しつ

ている。 ての、 である。 しい顕在化を強調している点で、 面をももつていることを指摘している。こうした「アフリカニズム」概念は、(9) な側面」ばかりでなく、 ここで、 側面から支えているといえよう。 アフリカニズム精神の具現化」であり、「ヨーロッパ人の政治的・経済的支配に対してのリアクションという否定的 すなわち、ヘイリーは、「ナショナリズム」よりもむしろ「アフリカニズム」というタームをもちいる方が当をえ と提言しつつ、運動としての「アフリカニズム」は、「戦後のアフリカを浮きぼりにするもつとも明確な特徴とし シェファードのアルトラ・アフリカニズム概念に関連して想起されるのが、 「特殊アフリカ的精神を、 前述したシェファードのいわゆる「アルトラ・アフリカニズム」の必然的抬頭という認識 現代のアフリカ人が解釈するままに制度化する」というより建設的な側 現代アフリカにおけるアフリカ性のいちじる ヘイリーの 「アフリカニズム」概念

ところで、「このアフリカニズムの精神は、 「分立は損であり、 地域的統合あるいは大陸的統一はおこなわれなければならない」という現実面の要請とから 国によりあるいは社会によつて、その力・その目標が多様である」(^<-リー)(2)

んで、それは、 必然的にパン・アフリカ的規模のものに拡大されざるをえない。

求するのは、 をたかめていこうとするとき、アフリカ性をもつともつよく表現できるような条件としての「アフリカの統一」をつよく要 在のようなメチャクチャな国境線のなかに、 されないだろう」とのべている。ここでこれ以上、(ユ) 道をいそぐこともできる」といい、さらに「全アフリカ的な次元でも、(コ) い3のである。 リーガムの指摘するように、「わずか二億三千万ほどの人口しかなく、 しかも資源分布のいちじるしく不均衡な大陸が、 統一の必要性について、 当然のことであろう。 したがつて、前述のように、アフリカ・ナショナリズムが自己発展の必然的結果として、アフリカ性の濃度 たとえばセク・トゥーレは「統一すればわれわれはつよい。統一すればわれわれは強力になる。 たとえば、 効果的で安定した国家をつくりだすことができるなどと、 だれも考えは N・アジキウエは、 個々のアフリカ人指導者の言葉を引用することはやめよう。要するに、 このような統一体を「アフリカン・リヴァイアサン」 政治的統一がなければ植民地主義は容易にうちたお

African Leviathan とよんでいるが、これこそアフリカニズム精神の典型的具現化であるといえよう。

ベルの会議における決議その他のなかにも、これをみてとることができる。以下そのいくつかを列挙すると、 第二回独立アフリカ諸国会議(一九六○年六月、アジズ・アベバ)──決議七、アフリカ統一の促進[5] このような「アフリカ統一」への志向性は、 個々の指導者の言葉にあらわれているだけではなく、 コンティ ネン タ ル・レ

「アフリカ諸国連合」 憲章(一九六一年七月、アクラ)――総則第一条=ガーナ、ギニア、マリ、 三共和国のあいだに、

フリカ諸国連合」(The Union of African States)として知られるべき連合を樹立することとする。 アフリカ合衆国 (The United States of Africa) の核とみなされるべきこととする (以下略)。(⑤) 第二条=アフリカ諸国連

カサブランカ会議 アフリカの統一を達成する決意を宣言する。(エン) (一九六一年一月)――憲章―われわれアフリカ諸国の首脳は ……全アフリカにわたる自由の勝利 を促

現代アフリカとパン・アフリカニズム

七 〇 七

モンロヴィア会議 (一九六一年五月)――アフリカ・マルガシュの統一を達成するための、 理解と協力を促進する手段に

全アフリカ人民会議(一九六○年一月、チュニス)──アフリカ統一に関する決議。(空)

ズムの段階にいたつて、アフリカの統一を不可欠の前提とするにいたつた。シェファードは、アルトラ・アフリカニズムに かくて、アフリカ・ナショナリズムは、アフリカ性=主体性の濃度がもつともたかい段階すなわちアルトラ・アフリカニ

アフリカ・ユニオンによつて超越する必要性とを強調する、パン・アフリカ的展望」を挙げているが、 このことは、(いさ(の) さか逆説的であるが)パン・アフリカニズムが、アルトラ・アフリカェズムを乗物として実践面でテイク・オフしたことと 特徴的な政治的主張の一つとして、「アフリカ人民の偉大な文化的人種的遺産と、植民地時代に由来する国境を政治的パン・

アフリカにおける主体性の最大公約数として明確にイデオロギー化されたことをも、あわせものがたつている。

パン・アフリカニズムがもつ現代的ヴァイタリティーの源泉は、まさに、ここにみいだされうるであろう。J・ニエレレ

無意味となり、時代錯誤的となり、そして危険におちこむことになる」と。急速な変革期にたつ現代アフリカに、主体的な(a) (現タンガニーカ共和国大統領) はいつている。「アフリカ・ナショナリズムは、もし同時にパン・アフリカニズムでないならば、

方向づけをあたえるイデオロギーとしてのパン・アフリカニズムの重さは、 ニエレレのこの言葉によつて、はつきりと示さ

- 1 George W Shepherd, Jr.. The Politics of African Nationalism: Challenge to American Policy, F. A. Praeger, New York, 1962, p. 13.
- 2 R. Emerson, From Empire to Nation: The Rise of Self-Assertion of Asian and African Peoples, pp. 10-11

れているのである。

3 Shepherd, op cit., p 13

4

Ibid., pp 10-11

5 Ibid., p 19. なお、消滅しつつある伝統主義がなにによつて代置されるか、については、シェファードのつぎの記述が示唆的である。「バラ

衆的基盤をもつた政党を組織したり、潜在的な伝統主義をよびさましたりすることによつて権力を保持しつづけるならば、アフリカ人はけつし 衆を民族意識にめざめさせることができる。大部分のアフリカ人はまだ西欧化していない。したがつて、もしアルトラ・アフリカニストが、大 盤をつくることができる。慣れしたしんだアフリカ的生活様式へのアピールは、近代西欧的観念へのアピールによるよりも容易に、文盲農民大 ドクシカルなことであるが、伝統主義のなかには、進歩的な潜在力も存在する。それは、 ある条件のもとでは、アルトラ・アフリカニズムの基

て西欧化しはしないであろう」(Ibid., p. 20)。

6

Ibid., p. 40

- 7 Ibid., p. 85.
- 8 Lord Hailey, An African Survey Revised 1956, A Study of Problems Arising in Africa South of The Sahara, Oxford Univ. Press,
- 9 Ibid., p. 252
- 10 Ibid., p. 252
- 11 セク・トゥーレ著、 小出・野沢訳『アフリカの未来像――黒アフリカの個性』(一九六一年、理論社)一五二頁:
- 12 前掲書五六頁
- 13 Legum, op. cit., p. 65
- 14 London to the Committee of African Organizations on August 12, 1961, in Legum, op. cit., p. 274. The Future of Pan Africanism: Extracts from an address by the Rt. Hon. Dr. Nvamdi Azikiwe, Governer-General of Nigeria, delivered
- 15 同会議の決議全文は Legum, op. cit. に収められている。「フフリカ統一の促進」については p. 152
- 16 同憲章の全文は Legum, Ibid. に収められている。なお総則第一条、 第二条については pp. 183-184
- 17 同憲章の全文は Legum, Ibid. に収められている。p. 187.
- 18 同会議における決議の全文は Legum, Ibid. に収められている。 なお同決議については、 Þ
- 同会議における決議の全文は Legum, Ibid. に収められている。なお同決議については、p. 239
- 20 Shepherd, op. cit., p. 85

19

Julius K. Nyerere, "A United States of Africa." The Journal of Modern African Studies, Vol. 1, No. 1 (March, 1963), p. 6.

### 五むす

び

され、 うことを明らかにした。 発展の必然的帰結ともいうべきフルトラ・アフリカニズムの段階にいたつて、 の手でアフリカに導入され、 てうまれ 以上においてわたくしは、 「民族主義化」されていつたこと、 アフリカと直接関係をもつことなしに展開されたパン・アフリカニズムが、 アフリカ・ナショナリズムと接合しつつ発展していく過程で「アフリカ化」 本来西インド諸島、 および、 アメリカ、 その過程のなかでパン・アフリカニズムは、 3 ロッパにおけるアフリカ系ニグロの消極的な抗議運動とし 主体性のイデオロギーとして凝結する、 一九四五年以後の時期にアフリカ人 7 フリカ・ され、 ナシ 3 「政治化」 ナリズム とい

こなうための基準である。 さるべき要素は自国のナショナル・カルチャーと"適合" れは、なにを借用すべきかをただしくきめるための基準をみいださねばならない。ナショナリストがもちいる基準は、輸入れは、ないを作り、 びたし〟となり自己の本体が失われてしまうのをおそれ、文化の輸入をコントロールしようとするにいたる。そのためにか 異質な西欧的文化の諸要素が洪水のように自国へ流れこんでくるのを、まのあたりにみる。そこでかれは、洪水によつて、水 できよう。 のアフリカに登場した、 およぶ科学的、 「ねばならない、ということである」(傍点引用者)。ここでいう基準とは、・・・・・・・・・・・・・・・・(ヒ) ここでとくに重要なのは、 すなわちマトシアンによれば、 芸術的、 という点である。 社会的、 このような基準は、 イデオロギーとしてのパン・アフリカニズムが、 経済的、 この点については、たとえばマトシアンの、つぎのような叙述を接用することも 政治的、 「工業的に遅れた国の知識人が近代西欧文明をみわたすとき、 その最高次の段階においては近代化のイデオロギーとなる。 宗教的発展に直面する。 しなければならず、かれの属するネイ 要するに主体性を確保しつつ工業化・近代化をお かれは、ジャズから製鉄工場にいたるまでの、 偶然にではなく、 ションを強化 一種の必然性をもつて現代 かれは五〇〇年に するのに役だ

このように、 低開発諸国においては、まず近代化のためのイデオロギーが設定され、それがテクノロジーの次元における

近代化をリードしていくという傾向がみられるが、アフリカの場合、 近代化の基準としてパン・アフリカニズムがイデオ

いたるまで完全に精緻化されているものもある、とのべているが、パン・アフリカニズムの場合、その構造は極めて不明(?) であるといわざるをえない。J・マーカムのいうように、まさしく「パン・アフリカニズムは、 ギー化された必然性は、こうした面からも理解できるであろう。 ところで、イデオロギーとしてのパン・アフリカニズムは、いつたいどのような構造をもつているであろうか。F・グロ イデオロギー一般について、なかにはほんのアウトラインしか形成されていないものもあれば、もつとも微妙な点に アフリカとともに変化する

理想的要素が比較的つよく、 の配合の様式や割合はイデオロギーによつてさまざまにことなる、とのべているが、パン・アフリカニズムの場合は、(4) ナイジェリアのW・アベンゴウェの、 いての分析あるいは判断、③自己の党派を正統づける哲学あるいは神話、という三つの構成要素をもつており、 イデオロギー」なのである。丸山真男氏は、イデオロギーが、⑴政治権力ないし運動の目標あるいは理想、 3 ナリズムはそれ自体目的ではない。それは目的に対する手段である。パン・アフリカニズムは、アフリカ・ナショナリズ (2)の分析、 つぎのような発言を引用することができよう。 ③の哲学・神話的要素はむしろよわいように思われる。たとえば、 すなわち、「われわれにとつて、ナシ (1)については、 (2)政治状況につ この三要素

は 平等でなければならない。これは一つの、そして唯一の道によつて実現されるであろう。その道とはなんであろうか。それ パン・アフリカニズムは比較的容易に、 これによつてあらゆる人種、 国、大陸が、他のものの平等な存在をただしく評価するような道である……」。ここでは: ヨリ高次の段階、 すなわち世界的な平和、統一、平等へと収斂する可能性を示して

パン・アフリカニズムの達成後における、

世界の究極的な望みは、

世界的な平和、

世界の統一、世界的な

⑵の政治的状況への分析は比較的よわく、 そのために、「パン・アフリカニズムはもはやたんなる理

系的とはいいがたい。総じて、イデオロギーとしてのパン・アフリカニズムは、その構造面においてアンバランスである、 進を示していない。さらに、③の哲学あるいは神話については、アフリカの個性、あるいはネグリテュード等、いずれも体 論ではない。それは事実なのである」(J・ヮチュク)とさえいわれながらも、 実践面でのパン・アフリカニズムは、 あまり前

といわざるをえないのである。

しかし、だからといつて、イデオロギーとしてのパン・アフリカニズムがもつ潜在力を看過することはあや まりで あろ

ているアフリカニズムの最大公約数だからである。

なぜならば、それは前述のように、アフリカ・ナショナリズムの必然的産物であり、いまやいちじるしい顕在化を示し

ĵ M. Matossian, Ideologies of Delayed Industrialization: Some Tensions and Ambiguities, in Kautsky (ed.), op. cit., p. 258 (Reprinted from

( $\propto$ ) F. Gross, Foreign Policy Analysis, Philosophical Library, New York, 1954, pp. 64-65

Economic Development and Cultural Change, Vol. VI, No. 3. April, 1958)

3 J. Marcum, Pan-Africanism: Present and Future, in The American Society of African Culture (ed.), op. cit., p. 64

5 4 『政治学事典』(昭和二九年、平凡社)七一頁。 W. Abengowe, op. cit., p 122

(G) J. Wachuku, Nigeria's Foreign Policy, in M MacLure & D. G. Anglin (ed.), Africa: The Political Pattern, Univ. of Toronto Press,

附記 本稿は、 昭和三十八年度慶應義塾学事振興資金による研究の一部である。